

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山代 悟

論文題目：仮設環境による都市再生像の生成に関する研究

本論文はインスタレーション・アートやパフォーマンス、ワークショップなどにおける、イベントの総合的なデザインを「仮設環境」と定義し、それをボトムアップのアーバンデザインの手法の一つとして位置づけ、その可能性や課題を検討するものである。

本論文は、資料編を含む全8章で構成されている。

序章においては、筆者がこれまで取り組んできたインスタレーション・アート、パフォーマンスの実践、それをアーバンデザインに接続する実践などについて概説し、研究の背景として1960年代以降の建築家の都市への視点の変化を論じ、その手法の一つとしての仮設環境を位置づけている。仮設環境は、設営撤去の容易な物理的な構造体、映像・照明・音響など装置によって発生させられる現象、それらをもちいた様々な時間軸にそった演出の総体と定義される。

第1章においては、日本の都市空間の特質としてのかいわい（界限）性に注目し、仮設環境という概念が日本の都市空間の基本的性質とも強い関連をもつものであることを示した。

第2章においては1960年代以降の都市計画に対するジェーン・ジェイコブスやクリストファー・アレグザンダーらの議論をとりあげ、そういった反省を受けて展開されてきたローレンス・ハルプリンらのワークショップの試みの展開や日本のまちづくりにおけるワークショップの導入について歴史的な経緯を示した。近年日本でも取り組みの始まっている社会実験の制度、シビックプライドの概念など、市民参加型の都市計画におけるボトムアップのアーバンデザインへの系譜を論じた。

第3章においては、筆者自らが共同主宰者として参加してきたアート・ユニットにおける実践を中心として、そこで用いている軽量の構造デザイン、映像や照明による立体的な空間のデザイン、音響による空間デザイン、イベントの開始から終了までのトータルな時間のデザインなどについて、技術面・制作面を中心に記述している。近年実践している照明や音響による建築スケールの空間デザイン「ソフト・アーキテクチャ」、あるいは広がりのある都市景観の中で展開する「メディアスケープ」などを紹介し、仮設環境の計画と実践の中で見えてきた可能性と課題を示している。

第4章においては、近年日本において交通行政やまちづくりの手法として導入が進んでいる社会実験について、その発生や日本での展開について論じている。

第5章では海外におけるアーティスト主導によるアートセンターやアート NPO など、Artist Run Initiative の関係者へのインタビューをもとに、運営面からボトムアップの活動を分析している。シドニー、メルボルンにおける調査からは、同種の活動の生成・成長・消滅のサイクルが明らかになり、都市再生の一端を担うボトムアップの活動組織としての良きモデルが示された。

第6章においては、ここまでの論を受けて、社会に対してある地域の課題や可能性、そしてその地域の都市再生像を提案し、その可能性を仮設環境の生成を通して体験・共有する手法について、4つの実践を中心に記述している。

オーストラリア・シドニーにおける都市再生のワークショップではワークショップ参加者とともに島の中の巨大なタービン工場の廃屋にその場所のポテンシャルを表現するインスタレーションを制作した。観客の中から今後の再生像に関する活発な議論を引き出すなど、仮設環境によって共通した実体験をもとに活発な意見交換が可能になることを示した。

日本橋地区におけるプロジェクトでは都市再生のデザインとともに、その再生によって生まれる空間の魅力やそこで生じるであろうアクティビティを疑似体験できる仮設環境のデザインを実践した。

島根県出雲市で実施したワークショップはワークショップの成果をイベント形式で示すと同時に、イベントや作業風景そのものが場所の可能性を表現するものであった。ワークショップの後に、地元地域関係者、行政、地元主催者などへのインタビューを実施し、イベントの意義や課題、今後の可能性を議論し、仮設環境のもつ都市再生への応用の可能性を検証した。

これらの取り組みのなかから、本論文で論じる、社会に対してある地域の課題や可能性、そしてその地域の都市再生像を提案し、その可能性を仮設環境の生成を通して体験・共有する手法、いい換えれば仮設環境による「都市実験」をボトムアップのアーバンデザインの手法としてもちいる可能性と課題を明らかにした。

第7章においては「仮設環境による都市実験」をボトムアップのアーバンデザインの手法としてもちいる可能性と課題を論じている。ここに収録した「仮設環境年表」は、メディア技術、メディアアート、建築、都市デザイン、関係法規などの年表となっており、相互に比較分析するための資料としている。

以上、本論文は、仮設環境という概念によって、都市再生像を都市空間のなかにつくり出し、市民のなかに共有体験をつくりだすことで市民参加型の都市デザインの可能性を拡張する社会的な意義の高い研究である。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。